女波

泉鏡花作

一

海水浴で盛場の濱邊も、日が暮れて九時は、人の出の引潮で、十時には最う寂寞する。・・・・・月の渚は、さらりと人間の塵芥を洗つて、紫陽花の青い蔭に、行水を仕濟した濡色の清い膚に、浪の浴衣をすら／＼と絡つて、山岬の緑なす黒髪を、巖が根の枕に解く。・・・・・

分けて今夜は、宵に被した暈が霞んで、朧々の薄曇りで、渚は薄化粧の媚かしさ、いろ／＼の貝は、櫻も、撫子も、阿古屋、菖蒲も、月に輝くとよりは、ほんのりと光を包んだ艶を燻した珠である。

襟飾、髪の飾、腕の装して、白々とした膚を、のぴ／＼と　ーー　磯馴松の濃き、青田の淺翠なす　ーー　大幅の蚊帳の彼方に、人間をごろ／＼させ、沖には鮫、鯨を泳がせながら、安かに、平かに、夜

露にしつとりと憩つた状は、宛然妖婦の面影である。

彼の女の呼吸は、靜な浪の音して、玉を走らした血が通ふ。・・・・・女性の海の、分けて内浦は美しい。

が、右左なくは人を寄せつけぬ。　ーー　近づいて此の姿を眺め得らるゝのは、戀を囁く、ものか、星に憧憬るゝものか、覺めながら、夢路を辿るものか、然らざれば身投げをするものでなければ成らぬ。

人は、影もない、誰も來ないだらう。渚の妖婦は村里に對する備を弛め、寢返りを打つて、沖の毒魚に乳を庇つた。月代移る山蔭に、波の形が打變る、時は、一時に近いのである。

時に、村へ往來の白砂の道一條の　ーー　晝は富士山が見えて其の影さへ映る　ーー　松原の中なる池のほとりに、キヤ／＼と冴えた女の高聲、笑聲、少し含んだ話聲、五六人と思ふのが、蟲の音は亂さずながら、路傍の青薄の露を散し、松葉を搖るか、

と蓮葉に聞えると、間に橋が一つ架つたのに、其の跫育もせず、風の通るやうに渡つたらしい。・・・・・唯、早や朦朧として、揃つて、濱に淡い影を見せた。

數へて五人である、女ばかり。

おなじやうな浴衣を被たが、結綿、島田、樂屋銀杏、束ね髪、思ひ／＼。で、一人も帶を占めて居ない。伊達卷も、扱帶も、納戸、朱鷺色、一結びやら、ぐる／＼卷、中には手拭を胸に提げて、解廣げの褄を掻取つたのさへ居て交つた。

顔は夕顔、月見草。昆蟲か何ぞ飛ぶやうな、ちら／＼賢しげな黒い目を、齊しく波に向けて、言合せたごとく一様に海を視た。

「可懷しいわねえ。」

「眞個に。・・・・・五年ぶりよ。」

「ほんとうに可懷しいよ。」

「久しぶりなんですもの。」

「嘸ぞ逢ひたかつたでせうね。」
と中にも一人、若い聲。
「生意氣言つてゐるよ。」
と中年増の躾めたらしい聲がして、其の櫛卷のが眞先に、すらりと、一鑿の雪になると、揃つて、はら／＼、すら／＼と脱いで、五個は、砂に映る髟も胡粉に成つた。

「お誂へだね。」
と一人が先立つて、誰かの建てた解衣場の葭簀へ入つた。・・・・・太脛に薄の葉の影。背筋が蔭つて、半身は月の隈と成る。

即ち中年増で、
「此だから、浮世は嬉しいんだよ。」
と、おくれ毛を拂ひながら、兩腕をすらりと上げて、前髪に結んだのは、それまで一寸口に銜へて居た眞青な稲の葉であつた。

「姉さん、何、それは。」

と手拭(てぬぐひ)を頬(ほゝ)に當(あ)てたのは、結綿(ゆひわた)の娘(むすめ)である。
「途中(とちう)で引扱(ひつこ)いて來(き)たんだあね、新藁氣取(しんわらきどり)さ。
ーー　海月(くらげ)の禁厭(まじなひ)、ほゝほゝほゝ。」
と晴(はれ)やかに笑(わら)つた。

二

「眞個、姉さん。」
「嘘でせう。」
「串戯なものかね、このくらゐな心掛がなくつて、大海で、お前、行水が出來るものかね。」
と年増が心得た様子をする。
「私にも。」
「一寸、私にも。」
「そんなに、お前さんたち、有りやしないよ。一葉づゝぐらゐなら、さあ殘つたのを・・・・・此處に置いといた。」
と葭簀の中の腰掛を教へて、緊つた小股で、すつと出て行く。
「薄よ。」
「あら、薄だわ。」
白い膚が二三枚、だまされた其の青薄に、穂が出たやうな手を靡かした。
「尤もお前さんたちの、其れはね。……」
年増の姉さんは、脇を抱いて振向いて、
「蛸を招くお禁厭。」

「可厭。」
「きやツ。」
と大袈裟な金切聾する。
姉さんは、おもしろづくに、手拭で印を結んで、
「そら、こちよ／＼こちよ、こちよ／＼、こちよ。」
「あれ。」
「ひい、御免。」
と、肩と肩と重り合ひ、伸び縮みして、浮いたと思ふと、はら／＼と手足がほぐれ、飜つて鴎の飛ぶやうに、咽喉、脇腹を影にして、乳も明白に、我勝に、渚へ五辨の白い花。薄曇の月に怪しくも吹いた、と見ると、ざぶり／＼と、音を立てゝ、散り込んだ
ーー　あ！　結綿のが泳いで行く。
「まあ、涼しい　ーー　あ！・・・・・冷たいぢやないか。」
と言つたのは姉さんで。誰かゞ、そツと背後から潮を撥掛けたのであつた。
「よくも人を　ーー　さあ、影を御覽。手と足合せて八本の蛸。」

遁げるのを追つ掛ける、背後から、背中を押へる、辷る、と泳ぐ。繁吹を立て、泡を捲いて、月に腕の跳ねる影、輝く魚に異ならず。乳房に雪の雲を湧かせ、胸から霞を吐くかと見えて、東海姫氏國の濱、一處、白粉の淵と成んぬ。

やがて大空が、上から壓へたらしく、一息、ひつそりと靜まつたと思ふと、水を颯と裳に曳き、雫を裾捌きでひた／＼と浪を出た。其の櫛卷の姉さんが、膝を搦んで、手枕に、片腕白く、鬢の緑を壓へつつ、渚に伸々と横に寢ながら、手まさぐりに貝を捨つて、掌で撓めて、衝と海面へ投げたのが、巧に水を切つて、きら／＼と青く飛んだ。

輝いて星が流るゝやうである。

この光が、花の四瓣の一枚々々を、つら／＼と照して、其處に簪の珠と成り、彼處に、胸の襟飾と成つて消えた。肩まで浸つたのが見え、乳を露したのが映り、結綿で踞つたのが映り、むかう向なる背も見えた。

貝を取つて、又投げた。おなじく光つて海を切つた。

四枚の肉は、其の趣と、其の位置とが皆變つた。

も一度、貝を取つて投げた時、其の四つの膚は、花瓣のつぼまる如く、一所にひたと合つて、半ば浮き、半ば沈みつゝ、恰も輕く寄する女波に送られて、ふら／＼と海を離れて出た。

櫛卷のがスツと立つと、月に蒼ずむ波の影、岬がくれに消えさうに、肩腰を寄せ合せる。疲れたのであらう。・・・・・揃つて、波のやうに、十個の足の爪さきが濡れた砂を含んで、さら／＼と、あの、葭簀の小屋へ立返る。

眞先に薄りと、雪の膚が綟字を張つて、簀の間を透して見たのが、

「あツ。」

と言つた。

口々に

「衣服がない。」

「あら、帯(おび)が。」

「紐(ひも)も。」

三

取亂したのは女たちで、葭聟の蔭に立惑ふのもあれば、砂に縮まるのもある。　ーー　すた／＼とあせるやうに歩行くのは、見る目に足もふらついて、背後から鐵棒で追立てらるゝ状がある。血の池、劍の山、白い犬、白い豚、狐、あられもなく、うろついて、さまよつて、畜生道のあはれが見えた。

自暴に手拭をたゝきつけた女さへあつた。

果は一團に成つたではないか。

五人の中に、稻の葉を唯一むすぴしたゞけで、顔の五面ある白い手足が、胴を一體にしてすくむと、薄月の波の影が、寂しい刺青を彼等に描く。・・・・・遠音の蟲も、聲に絲を引いて、はた織りつゝ、膚に透る。・・・・・皆たゞ萎々と成つたのである。

「やあ、役者。」

「別嬪揃ひ。」

あたりに引上げた船の舷の蔭だの、大きな鮹畚の

背後から、三人ばかり村方の惡若い衆が、むくむくと頼れた。

ーー　扨は女たちは、停車場前の座に興行中の、旅藝人の一座であつた。

「いけどりだぞ。」

「選取り、つかみ取りよ。　わはゝゝは。」

「きものさ、あとで相談づくだえ。」

深夜の風が、大輪なる肉の五瓣の花片に颯と戰いだと思ふと、あの貝を投げた手をはじめて、ハツと飛ばす砂が黄色に散つた。またゝくまに、透間あらせず手に手に投げた。

目潰しをくつた若い衆は、獣のやうに叫びながら、たゞ狂ひまはるばかりである。

「構ふものかね。宿まで八町足らずだよ　ーー

さあ、おいで。」

砂路を眞すぐに行く状は、霞に成り、千鳥に成り、

鷺に成つた。　ーー　松原に、橋に、蘆に、垣根に、
其の姿に、月がこの時光を浴びせて淡く白砂の亂るゝ
色は、町もさながら、何處までも渚であつた。

波さへ青白く送るやうに、・・・・・逗子の濱の
夜更である。

【完】